

# 岩屋山 観音たより

## ほとけの微笑

発行所：和歌山県  
海草郡下津町橋本一〇六五  
福勝寺内  
電話 (073) 4941031  
編集人：本多碩峯



釈迦如来 奈良 法隆寺

広大無辺な密教を含む佛教はすべて釈尊を起源にしている。釈尊もしなかりせば、佛教はありません。  
お釈迦さんは大衆に向かつていろいろのことを説法されました。そのお釈迦さんの言葉を理解できるものはおそらく十大弟子や五百羅漢たちであって、初めて聞いた大衆には難しかったでしょう。でも、それをいつも微笑みをもって話されるお釈迦さんの姿は、大衆にとってはそれを聞いてい

るだけで有りがたく尊いお話でした。お釈迦さんのお口について、「広長舌相（こうちようぜつそう）」というのがあるのですが、お釈迦さんの舌は広く長くその舌を出すとお釈迦さんの顔全体を隠してしまつほどの広さだといつので、これは弁舌さわやかという喩えであつて、現実の大きさではありません。動物の親子の姿を見ておりますと、このことがよくわかります。親子の顔や全身を舌でなめまわしているときです。

### 真理の花たば



三味の法は、  
本より我が心に具す

自分の頭で考えた自分の理想像を外に追つてもそこには悟りはない。  
自分のありのままを見ることが悟りである。

弘法大師講本部・四国六番安楽寺  
住職・畠田秀峰師書

おそらく子にとっては親の舌はその子の頭部全体をも包んでしまつ大きさに感じているのではないでしょう。か。つまり、子を愛撫する親の姿です。わたくしたち大衆にはお釈迦さんこそやさしい親のような方なのです。  
また瞳は「金精相（こんせいそう）」で、眼（め）がきよくくして青白分明（せいはいくぶんめい）とありますから、白目の部分は濁りない白色で、瞳は金色で青味のある水晶のように澄み切っていたといふことでしょう。また睫毛（まつげ）は牛の睫毛のように長く、その毛並みも密で、抜け毛や白髪（しらぎ）などありません。

### 明日への装いを提案します!

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 **マスメン**

代表取締役 増田都司夫

本社

〒640-8376 和歌山市新中通 2 丁目 8

TEL (073) 424-4466 (代表) FAX (073) 436-6508

### 豊かなまちづくりに参加します!

株式会社 **田淵建築設計事務所**

代表取締役 木田耕蔵

本社

〒640-8287 和歌山市築港 4 丁目 2-1

TEL (073) 431-0261 (代表) FAX (073) 431-3898

# 二十一世紀は生きがいの創造(五)

修行僧 同行二人 本多 碩 峯

次に鼻は高く、まつすくで、鼻の孔は見えないというのです。でも、下から見上げている大衆にはその孔は当然見える筈です。ところがこの点が面白いと思つたのです。

つまり、自分の足元にいる大衆に向かって首を直角に曲げているお釈迦さんの姿です。だから大衆には鼻筋は見えていたのですが、その鼻の孔はお釈迦さんの胸元に向いている状態ですから、その孔が見えなかつたということでしょう。次に口の形は上唇と下唇は同じ厚みと幅で、色は果物のように真っ赤であるというのですが、これこそ生氣あふれるお釈迦さんの気迫が見られます。この真っ赤な唇からほとぼる暖かみのある一言一言が宇宙の真理であり、それが仏教となつて衆生を救い、一人一人に善の命を植え付けてくださつて居るのです。

お釈迦さんのお顔はいつも和願愛語を微笑み、顔の色は光沢あつて和らぎ、喜びに満ちています。

どんな無理なことでも一言ももらすことなく、すべてを聞き取つてくださるおおらかな心、これが微笑みをふくんだ口元や目元と一体になつてわたしたち衆生に向けているのです。このお釈迦さんの心を形として表現されたのが仏像の顔なのです。

この仏の説法を聞く衆生は、阿耨多羅三藐三菩提を得ます。

生きがいということになりますと、人はそれぞれ生きがいを感ずる生きています。私も私なりに僧として生きがいを感ずりていきておりますが、大学時代から六十六歳の今まで少なくとも四十年間大いなる生きがいを感ずってきたかということになりますと決してそうではありません。

事業の挫折で人生がいやになつたこともあります。何とかして自分の人生を再び意義あるものにしたく、決意したのが四国八十八ヶ所徒歩巡拝でした。今日だつて年中生きがいある人生かと問われたらノーと答えざるを得ない。人はそれぞれ人の持ち方にして、いろいろな人の話を聞くことも良いのですが、いずれにせよ、自分でいろいろ思い直して生き続けているわけです。

あんまり思い直さずに、ずっと一生いつも生きがいを続けられたらこんな良いことはないのですが、人生はそういうふうにはいきません。いろいろなこととに突きあたつて悲観しながら、また氣を取り直して生き続けて行くのです。

自分に大変生きがいを感ずるからと、やりたい事を是非でもやるうとしたら、そしてその結果が他人に非常に迷惑がかかることであれば、これは大い

に考え直す必要がある。このことは社会的に重大な問題を提示することがあります。学問的にも、経済的にも、政治的にも、宗教的にも、国際社会にもそうであります。個と全、一人の問題からいつの間にか集団、多くの人の問題社会的、国家的な問題に発展するからです。

人は生きがいを考える時に、なにか人に認められたい。或は仮に認められなくても人にわからなくてもこの事は必ず認められなければならない真理だ、と、そなところには人の本当の生きがいというものが出てくるのではないでしょう。

ここで多の人様に迷惑をかけない生きがいという事が大切になつてきます。ここで大切なことは創造的に生きることであり、より生きがいある生活をするということとは創造的に生きることを手助けとなることです。

しかし、人間が非常に創造的な活動で成功することはめつたにありません。めつたに起こらないが故に貴重なのであつて、常に同じことのくり返しであるのです。私は広い境内の手入れをしな

つも感ずることは無数の植物は日ごとに年々変わつてゆくなどありえませんが、決まつた時期に決まつた場所には決まつた植物の綺麗な花が咲きます。

この季節になりますと決まつて、境内の裏見の滝壺の脇には毎朝、大きなズガニが落下しているのです。

人間は常に新しいことに、と躍起になります。新しいこと、と躍起に重要なことでないのかもしれない。決まつた時間に起床し顔を洗い、歯を磨く人間誰でも小さい時から繰り返して、くり返し決まつたことを繰り返して行きます。

私は考えてみますと大変なテーマ「二十一世紀は生きがいの創造」を書かせて頂きましたが、何か私のようなものにはあまり大きく恥ずかしい限りです。

生きがいある生活は人それぞれ、生活に取り組んでおりますが、創造性を発揮するには、それを補つたための万能薬や即効薬などありません。

一番大切なことは心(識)は受容器だと考えます。その心という器の蓋(ふた)を必要に応じて開けることが大変重要なことだと思ひます。

昔は自分の生き方を自由に選ぶなど全く不可能な時代があつた。非常に不幸な人が多く、生きがいある生活など高嶺の花だつた。そのような時代は宗教が、今日より大きな力を持つていた。二千何百年の昔には大宗教がいくつも出現した。

例えば仏教が現れた。それより前にすでにバラモン教のようなものがありました。キリスト教は少しおくれで二千年前に出現しましたが、それより以前にユダヤ教があった。中国では儒教が出現し、少しおくれで道教ができました。それらは宗教的性質を持っていました。今日の生きがいは少し違つよつです。

自分の内なる生きがいと外への生きがい両方の条件を満たすような生きがいが一番望ましいことです。

今日「革命と云われコンピュータが人間に代わり何でも仕事をしてくれると考えられていますか。コンピュータ自身は創造的能力を持っていないということです。人間のためによく働いてくれますが、コンピュータというものは、与えられた命令に従って、記憶と推論を間違ひなく、非常な速度でやってくれます。人間なら非常に時間が掛かりますし、途中で間違ひたり、或いはいやになつたりする計算や推論を、いやがらず、しかも素早くやってくれます。青年時代磁気機雷の電子化の開発に携わった時に手回し計算機を使い、一つの計算に一週間ほどかけて答えを出す経験をし、後々のヒンズーアラビック数字電卓の開発に繋がつていった。

要はコンピュータは人間の肉体に近いように思います。コンピュータに命令を下すところが人間ですがそれ自身を考へる、思考する、創造するところが心識なんです。

仏教では比喩たとえ話がよく使われていますが、孔子や老子、荘子、あるいは西洋のギリシャの賢人とか、あるいは聖書であつてもたとえ話が沢山出てくるので

この比喩は人に教える、人にわからせるために大変役に立っている。話の上手な人はたとえ話を上手にしますが、仮に人に教えるということ自身創造でありません。自分もつわかつている。わかつてしまつてからだとたとえ話も、あとの話です。

実は自分がわからなかつたことがたとえ話をしている内、頭のいい人が頭の悪い人に理解させるためにたとえ話をしているように見えますが、あまたのいい人も最初そういつたとえ話を思いついて実は自分自身が難しい真理を自分に新たに納得させるさせることあるでしょう。

このような思考の推論をアナロジーといわれています。一般に創造はこのような推論の話から生まれるのでしよう。

私が開発業務に携わつた経験から今日アファニスタンの紛争で特に思い出深いことを取り上げさせて頂きました。私にとつては最も素晴らしい創造者であり『尊いいのち』を生かされた、お釈迦

さんであり弘法大師空海であります。

お釈迦さんの人生を見ましても決して誕生して没する八十歳までずっと、生きがいある人生をおくつたではありません。

三十五歳にやつと菩提樹下で大悟になつて伝道が始まりますが、何かと難題にぶつかります。救つたのはお釈迦さんの素晴らしい高貴な創造力であつたと思います。「四門出遊」で老いた人、病人、死人、修行者を見た状況に「自分を重ね合わせて考える大慈悲を持ったお釈迦さんだったので

今日、日本の仏教は受難の時代を迎えているといふ。しかし、キリスト教やイスラム教でも全く同じこといえる筈だ。

「歴史の終焉」といふのがある。ベルリンの壁、「革命」が起こつて東欧が解体し、ソ連の社会主義が崩壊した。共産主義対資本主義の争いに決着がついた。リベラルの民主主義と資本主義の勝利によつて「歴史」発展のレースは終了したのだといふ。つまり「歴史の終焉」といふわけである。

果たしてそんなのだろうか。宗教もその運命も終末に近づいているのだろうか。今回のテロの問題を通して少し立ち止まって考える必要がある。

仏教とはこの「末法」の世において益々光明を発する哲学であり倫理である。人間を含むこの大宇宙の五大要素で育む生物の生きがいを創造しよう。

ヒンズーアラビック  
数字の  
電卓開発

二ニューヨーク市の世界貿易センターで同時多発テロの勃発で何の罪の無い、我が日本人を含む六千人程の市民が犠牲者となり帰らぬ人となつた。残された家族にとつてもこんな不幸なことはいない。テロへの報復戦争で米英軍がアフガニスタンへ毎日のように空爆が行われ、これまた何の罪の無い人達何百万人の人達が傷つき、難民となつてさ迷っているこんな不幸なことが起きて迷っているこんな不幸なことが起つて言ひののだろうか。今回の大事件には私自身特別の想いがある。二十歳代に防衛庁の兵器の電子化の開発に携わつたこと。一九七三年に上記数字の中近東向けに電卓、時計の開発を行い、その為に日本に駐在する各国の領事館、大使館に大変親切で暖かい指導を受けた結果として開発できたからです。当時は二ニューヨークタイムズ、二ニューズウィーク誌等で紹介され、これこそベンチャー企業到来と賞賛された。私と一緒に開発に携わつた青年技術者の想いを回想しますとその想いは当に中近東の平安に生活される国民の相

9 8 7 6 5 4 3 2 1 0  
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

(すがた)の創造があったからこそ完成したのです、携わる技術者には何の囚われも無い自由があったのです。

音楽に国境無く差別が無い

友人石田豊彦氏の「子息裕子君神戸大学生」で、シオ大阪の音楽番組のDJを担当している彼からメールが届く。音楽には沢山のジャンルがあり、世界には無数の民族音楽がある。それらは地球上の人類に心地よく受け入れられ、そこには差別も争いも無い本心に素直らしい」といつ内容であった。森の中の小鳥の囀りが心地よく聞こえる事と、人間の音楽が争い無く生活を豊かにする事は共に何の囚われも無く自由で常に新しいもの、新しい形を創造しているからだ。私自身は楽器を何ら扱えませんが音楽がかかると出す秀逸感が好きだ、事業していた時代には社内のパーティーには社員のパンド演奏に普段の疲れた体を癒やされた。

釈尊の誕生から正道へ

お釈迦さんは、紀元前五世紀もしくは六世紀に釈迦族の王族誕生したといわれる。母マヤー夫人(摩耶)は生まれて七日目に亡くなり、それから母マヤー夫人の妹であるマハーパシヤーパティに養育されることになった。父浄飯王は亡妻の妹を後妻に迎えたことになり、お釈迦さんが生まれてすぐ生母に死に別れ、継母によつて育てられたことは重要であります。

母に死に別れたといふことは捨て子の孤独を味わったといふことです。大いなるものから切り離されるといふ悲哀のなかで、人生を歩みはじめたといふことです。

この経験はお釈迦さんのその後の運命に陰に陽に作用することになったのではないだろうか。お釈迦さんが成長してしてから、家族を捨てて故郷を捨てて、修行者にするみ出ていく。幼時の捨て子が成長して自覚的な捨て子として生きていくことを決意する。単独者としての孤独と悲哀の人生を少しずつ受容するようになる。時をへだててふたたび、捨て子の境涯を徹底的に生きぬこうと思いついたのだといえます。

勿論、そこに至るまでには、また幾つかの曲折が横たわっていた。少年シッター(幼年時代の釈迦の名前)が自立した修行者の道を選びとるまでには、幾つか超えなければならぬ人生のハードルが待ちかかっていた。

シヤカ王族に生まれた子として、学問と修養の日々を送るようになった。尊者になるための道を、無意識のうちになんげと歩いていた。そしていつ頃からか、憂愁の思いが青年シッターの心をとりこめるようになったことだと思つた。多分感受性の強い少年の心はちょっとした事でもすぐ傷つく。地位や物質的な満足によつては癒されることのない葛藤が胸元をつきあげたことだ。

人生の問題が次第に眼前にたちはだ

かるようになった。それが「四門出遊(しもんしゅつゆづ)」という名で知られている問題であった。

シヤカの住む都には、東西南北に四つの城門が設けられていた。シッターがまだ十代のあるとき、シッターが東も城門を出ると、そこによるよるした老人がいるのに出会った。南の城門を出たところで、病人に出会い、西の門を出たときは死人の屍(しかばね)を見てしまった。そして城に戻って来ると、出家した修行者が歩いて来るのに遭遇する。シッターはその時、自分の運命をその修行者の姿のうえに重ねていた。この話はどんな人間も老・病・死の運命を免れることが出来ない。そのことを悟つて求道の生活に入つていった釈迦を称える神話である。

ここで私達は考えなければならぬ重要な問題がある。お釈迦さんは人間の避けては通れない運命の老・病・死という動かしがたい事実を眼を開かれ、その問題についてしだいに思い悩み、後に仏教では生・老・病・死ということを説くようになった。これら四苦すら昨今、科学技術の飛躍的な創造により、臓器移植やDNA技術によつて人間の手で少しはコントロール出来るようになったことです。肉体の生きる命と霊的(精神的)

な永遠の命とが革めて重要さが浮き彫りになったことです。

青年シッター(釈迦)は伝承によると十六歳のとき結婚する。当時の慣習で三人の妻がいたといふ。彼は結婚に踏み切るまでに、現実の快樂へと向かう生の関心と、現実における悲惨さを象徴する老・病・死がいわば分裂したまま、青年シッターの心は現実の快樂と現実の悲惨の両者に引き裂かれたまま悩み、迷い自分の歩むべき道を見出しかねていた。そんな悩みの中に彼は結婚にふみきつた。この十代の後半の若者に、結婚はまったく別世界のあることを教えることになつたにちがいない。新しい伴侶をえて、愛の歎びに我を忘れる生活がつづく。王子と

皆さんのスーパー

株式会社 **みち屋**

代表取締役 **道畑 勇**

本部 和歌山市岩橋729番地の6  
TEL (073) 473-4197

松島店 和歌山市加納246番地の1  
TEL (073) 474-3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山517番地  
TEL (0736) 64-7020



(5)

<p>しての仕事が軌道にのり、政治や祭りなどの行事にも手をそめてゆく。青年シッダッタは、結婚して子供をつくり新しい世界にふみだしていった。家庭の人となり、家族の養育や家の祭りに力をそそぐようになった。しかしそのような日常生活の中でも、老・病・死の問題がふとよみがえり、シッダッタの神経を刺激する。一度、心の奥深く刻みこまれた「四門出遊」の体験はそう簡単に消えるものでない。</p>	<p>あてもなくさ迷い歩く一人旅は勝つて気ままで、自由な気分が満たされていたことだろう。</p> <p>森に入って静かに瞑想し、心ゆくまで書物を読み、水の流れに身をひたし、山に上つて広大無辺な大自然の景観に心を和ませるときを楽しんでいたであろう。そういう生活のくり返しのなかに、シヤカは世俗の生活から少しずつ離脱していった。すなわち、その身心の訓練に疲れはて、絶望に沈み希望に胸をふくらませるくり返しの中で、遍歴の旅であった。</p>	<p>ついに家を出ようと思い始める。シッダッタは二十九歳、最愛の妻子を捨てて、一人の旅に出る。開悟の奇跡が訪れるか、あるいはさらにいつそう深く暗い黒い闇があらわれるか。それは全くわからないことであった。確たる当てもなく家を出てさ迷い歩いて行つただろう。シヤカ(シッダッタ)の家出の事件を、解脱を求めての「家出」というようになりましたが、シヤカは家出時はその「解脱」というものがどついつものであるか等わかるはずもない。</p>	<p>ともかくシヤカは自己に問いかけ、自己の身心を凝視しつづける六年が過ぎた。それは肉体的にも精神的にも耐えがたい難路をゆく試練であった。しかしその紆余曲折のなかで、目指すべき目標点かしばられていった。</p> <p>ダイナミックで難行苦行にかわって、静寂な瞑想の世界が眼前に開けてきたのです。それは六年の歳月が過ぎ去り、捨てたとき、シヤカは中インドのマガダ国のガヤにやってきました。そのガヤの郊外には大きく繁った菩提樹がすくすくと立っていた。やせ土にもかかわらず、がっしりと地上に根をおろし、天空高くその梢(こずえ)を差しのぼっていたのです。天と地を結び堅牢(けんろう)な支柱(ちゅうち)とな見難い苦があつても、天に繋がる尊い(とんい)のちがあることをシヤカはイメーシとしてシヤカの心をひきつけたのです。</p>	<p>二十九歳のシヤカは家族を捨て城を去り、六年のあいだ、いろいろな地方を旅し、さまざま主張をもつ修行者や学者に出会って、論争し、その上、難行苦行に挑んでいる。荒々しい武者修行の遍歴時代であった。しかしその反面</p>	<p>シヤカはいつのまにか、くる日もその菩提樹のもとに身を寄せて、瞑想にふけるようになった。菩提樹の精気がシヤカの疲れ切つた体を引き寄せたのかもしれない。菩提樹が大地に根ついているように、その樹の根元に坐りつづけた。菩提樹がその枝葉を天空にむけ広げているように、シヤカもまたその意識をしいに明澄にして、広大無辺の宇宙に解き放つようになった。</p> <p>シヤカは三十五歳にして家を出て六年後この菩提樹の根元で大悟され、人間釈尊は仏陀となられたのです。浄飯王(じょうはんおう)を父に、皐天子(こうてんし)としてインドに出生された仏陀釈尊は、迷っている一切衆生を救済するために衆生の機根(きこん)・仏の教を聞いて、悟りを開くための基盤となる(こ)に心じて現せられた仏身(ぶつじん)すなわち(心身)お(う)じ(ん)なのです。</p>	<p>釈迦が四十数年間の遊行と伝道の生活が開始され、菩提樹の根元で解脱をえたのが三十五歳のとき、そしてクシナーラーの地で最後の息をひきとる八十歳までの四十数年の充実と成熟の時代がつづく。</p> <p>この充実と成熟の時代を支えたものは、いったい何であったか。それは菩提樹下における瞑想の体験であったと私は思ふ。この瞑想の体験がもしなかったら、釈尊のその後の人生は真の意味において存在しなかつたにちがいない。釈尊はその時の体験を片時も忘れず記憶し、反省しつつ生きていたはずである。伝道の途上で迷路に</p>	<p>さ迷いこんだよつなとき、思わぬ困難に直面したよつなとき、その体験の記憶に立ちもどつて、自分の進むべき道を見定めよつなことでしよう。その反省のくり返しの中で、菩提樹下での体験がいよいよはっきりした形をとるようになっていった。</p> <p>瞑想体験といつのは、要するに身心の統合が低い水準から高い水準へ、あるいは逆に高い水準から低い水準へと、不断に往復運動をくり返している状態のことであり、心をつよく意識する瞬間とからだをつよく意識する瞬間が無限に交替している状態であるといつていい。</p> <p>そしておそらく、菩提樹下で悟りを開いたときの釈尊の身心の状態の交替現象のなかで、瞑想を続けていたに違いない。その交替現象は成道以前においてそうであったように、成道後においても変わりがなかつたはずである。成道前における身心の統合度が、常に低いといふことではなかつただろう。同じように、成道後においてその統合度が常に高い水準を示していたといふように考えることも不自然である。成道の瞬間と共に、釈尊の身心が不動の統合を実現したと考えるのは少なくとも現実的ではない。</p> <p>ここで重要なことは、釈尊がその瞑想体験の持続の中で、身心統合には高い水準のものと低い水準のものがあるといふことを、ある段階で自覚した</p>
--	---	--	---	---	--	---	---

といふことである。少なくとも二つの異なる方向に傾斜する身心の統合の型が、そこに存在することを知らずに違いない。それが釈尊における「成道」といふことの真の意味だったのではないかと思ひます。身体を媒介にした瞑想においては、そういう二種の方向に向かう体験を不可避のプロセスとして常に生起する。そこに釈尊は自然に気付かれたに違いない。あとはその経験を事実としてそのまま認めることである。そしてそれこそ釈尊の「正見」であり「正思」であつたと思ひます。

**釈尊の罪報**

『大智度論』巻第九に次のような質疑応答がある。

「転輪聖王や諸大聖人の中にも大力と光明と威徳をもつ者がいるのに、どうして世尊だけが特に尊いと言われるのか」との質問に答えて、転輪聖王たちの功徳には量等に限界があるが、世尊の功徳は無量であり無限であつて限界がない。だから徳に尊いのである」と次にまた問う。「もし仏の神力が無量であつても、その威徳は魏魏(広大)であると言えないのではないか。それはどうしてかと言つと、世尊は九つの罪報を受けているから」と。それに答えて言つ。「仏は人中に在りて生まれり、父母あり、人身の力を受け、一指節の力は千万億那由他の白象の力に勝る。神通力は無量無数にして不可思議なり。

是の淨飯王の子、老病死の苦を厭い、出家して仏道を得。是の人豈(あに)・反し(に)罪報を受け、寒熱等の為に困しめられんや。仏の如きは神通力不可思議なり。不可思議の法の中に何ぞ寒熱の諸の患いあらんや。」

ここでの質問者は、あくまでも九つの罪報を受けた肉身の仏陀について、三千大千世界の十方の仏国土で、光明色像、威徳の魏魏(ぎぎ)である仏陀が、どうして緒の罪報を受けるのか問う。これに対し、仏陀は人々の中に生まれ、た淨飯王の子であり、出家して悟りを得て、神通力を得た。その仏陀にどうして寒熱などの患いがあるのか、ありはしない、という。ここでは、仏陀の伝記を引いて肉身の仏陀が成道し、成道した仏陀にどうして緒の罪報があるのかと否定している。

仏陀のうけた九つの罪報は、弟子や衆生を教化する為の方便であつたと言われている。

従つて、仏のその徳は特に尊しくて、巧妙色像威徳疑義「たることに疑いはない」といふ。

因みに罪報の二つを紹介しよう。その一つは釈迦は毎日の食物は托鉢でまかなわれていた。ある日、バラモンの部落を托鉢して回つたが、托鉢の収穫がなく一日を終え、弟子とともに空腹を我慢しなければならなかつた、といふ。食物にも見放されるといふ不徳。

二つに、ある非常に寒い日、釈迦がたまりかねて、側にあつた他人の衣に手をつけた、といふ罪。

**仏陀觀**

ここであつた仏陀を単なる肉身の仏陀とはせず、三十二相を具すよつな超人格を具えた者として捉えている。この仏格を「報身」といふ。三千大千世界に光明を發している仏陀の有様は、瞑想世界のことでありませぬ。

初期仏教で、仏の二身が説かれた。一身

一身仏(しんぶつ)・父母

生身の歴史上の人である釈尊をいふ

法身仏(ほつしんぶつ)・仏陀の

説かれた常住不滅の法・真理をいふ。

大乘仏教で次の三身が説かれ

二身

法身仏(ほつしんぶつ)・所觀の理

觀しられる真理・いろもなし かつ

ちもませぬ

人間の思議を絶した根源的實在

報身仏(ほつじんぶつ)・能觀の智

理智不二であるところの觀する智・阿

彌陀仏

心身仏(おつじんぶつ)・報身仏が

衆生済度のために人間の体をもつてこ

の世に出た・釈尊

四身

三身に化身仏(けしんぶつ)を加えたものをいふ

化身仏(けしんぶつ)・一切の生きとし生きるものを済度するための異類身。

**仏教の成立**

ブッダは菩提樹下のもとで悟りを成就して七日間瞑想に入つてその目覚めの世界を享受した後、初夜・中夜・後夜の三時に、それぞれ偈を唱えた。

やがて、覺者となつたブッダはガンジス川沿いのペナレスの郊外に広がるサルナート(鹿野苑・ろくやおん)で、少数の修行者を相手に語りはじめた。

菩提樹下で得た体験を言葉少なにポツツリポツツリと語るよつになつた。静かな声音が、不思議な輝きをおびて、それを聞く者たちの心に吸い込まれていった。

こつしてブッダの周辺には、弟子が集まるよつになつた。ブッダの教えを聞く集団が生まれブッダを中心とする新しい共同生活がはじまつた。ブッダという一人の予言者とブッダに引きつけられる少数の道を求める者たちが光点のような凝集体をつくりだす。ブッダの体験をよりどころにする教えが形をなし、仏教が成立したのです。

**バラモン教の顛倒**

『起世因本經』の一節にバラモン出身のヴァーセッタとバーラドヴァーシヤの二人が、ブッダに近づいてブッダの法話を聞こうとした。しかし二人はバラモン出身であるために、ブッダに近づくのバラモンたちから非難されることを恐れている。

その時、ブツダはヴァーセッタに語り掛ける。「バラモンの生まれとバラモンの系統とに於て優れたる汝等は、バラモン種族の家庭生活より出で、家なき生活に入れり。ヴァーセッタよバラモンは汝等を非難し罵倒することなきや。」すると、ヴァーセッタは答える。

「唯、実に然り、尊者、バラモンは実にバラモン特有の罵倒を以て、存分に我等を非難し、罵倒して止むことなし。」  
「然らばヴァーセッタよ如何なる言葉を以て、バラモンは実にバラモン特有の罵倒を以て、存分に汝等を非難し罵倒して止むことなきや。」

「尊者、バラモンは斯(か)く言つ『バラモン種は最上なる種族なり、其の他は劣等なる種族なり。バラモンのみ純粹なり、バラモンならざる者は然らず。バラモンのみ梵天の眞正なる子にして、その口より生まれたり。梵天より生まれ、梵天によりて造られた梵天の相続人なり。汝等は高貴の階級を捨て、かの賤種(せんしゆ)の階級に近づくのみならず、かの剃髪せる沙門、賤しき黒人、我等一族の足より生まれたる者として親しむ。斯くの如きは宜しからず斯くの如きは適當ならず。汝等は高貴の階級を捨て、かの賤種に近づくのみならず、かの剃髪せる沙門、賤しき黒人、我等一族の足より生まれたる者と親しまんとは」と。  
斯くの如き語を以て、尊者、バラモンは我等を、バラモン特有の罵倒を以て、

存分に非難し罵倒して止むことなし」と。

バラモンはこのようにブツダの法話を聞くことと集まる者を差別罵倒する。

ブツダは後にヴァーセッタに次のように語っている。

「ヴァーセッタよ、生まれの異なる、名の異なる、姓の異なる、家系の異なる汝等は、家を出て家なき生活に入れり。『汝等は何者ぞ』と、質ねられなば、その時汝は答ふべし、『我等は釈迦族の子孫なる彼に従える沙門なり』とヴァーセッタよ、如来(ゴザマブツダ)に信を置き信を根ざし、信を確立し、信を堅固にして、或はバラモンによりても、或は天のよりても、或は魔によりても、或は世間の如何なる者によりても、信を動揺せられざる者は、いみじくも斯く言はん我等(善男子、善女子の子)は世尊の眞正なる子なり、彼(ブツダ)の口より生まれ、法より生じ、法よりて造られ、法の後継者なり」と。  
『起世因本経』から当時のインドはカースト制度のもとアウトカーストを含む白人あり、黒人あり、多民族の中に人種差別があり、宗教にも差別を感じます。ところが、釈尊の見事な心の広さ、大きさを感ずりますね。密教を含む日本の仏教、世界の仏教はすべて釈尊を起源として出発しております。釈尊もしなければ、一切の仏教はありません。

ヒンズー教の仏をも取りこんでます。

正に創造であり、素晴らしい生きがいであり、執着点であり、仏教はこれを越えることはありません。勿論キリスト教も、多の宗教もその点は同じだと思います。

然し、自然科学ではそうではありません。せんニュートン力学をアインシュタインが出てきて、ニュートン力学は執着点ではなかった。通過点であった。(終わり)

### 法身説法

#### 自由の創造

この度、越智淳仁教授の講義「法身説法の研究」を受講研究すること、歡喜溢れる思いで感謝一杯です。

この講義で学んだ第一の収穫は釈尊の教え、報身仏や変化仏の説かれた頭教と法身大日如来が説かれた密教が別ものでないと言つことであります。

広大無辺な密教を含む佛教はすべて釈尊を起源にしている。釈尊、もしなかりせば、佛教は無い。

したがって、従来頭教の仏陀釈尊が、證かされた法(真理)を法身とする法身は、真如とか法性とかの言葉で表現せられている純粹の真理を指しています。純粹を法身とする以上、法身は無形無色で、説法といつよつな具体的活動を為さないと、当然です。この意味から頭教では法身不説法が



有限会社 **ミヤタケ**  
代表取締役 **宮下隆博**

〒640-8329  
和歌山市田中町4-119  
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

有限会社 **日本メディテックス**  
代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054  
和歌山市塩屋5丁目5番43号  
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

通説となつてきております。

にもかかわらず、弘法大師空海は、法身大日如来が説かれた教えが密教である。と、法身が説法するといふ独自の立場をとつてきました。

講義で習得している最も大切なことは、顕教の法身不説法と法身大日如来の説法の二つの異なりを研究することです。無といふことではありません。

廣大無辺な大宇宙で、五大要素が育む唯一つの地球であると、その地球に五大要素が育む故に地球の如何なる地域、南極でも北極でも熱帯地域でも地域環境に適した生物が育んでいると、そして我ら人間はそれらの生物の一つである。その人間は識(心)をも育んだ六大要素といふ。

法身大日如来の説法あればこそ、この地球に人間が顕現され、二十一世紀の今日まで永遠と創造が繰り返されているのであります。

したがって、弘法大師空海が開創された密教は正に偉大な創造者として創造されてきました。

人間釈尊が菩提樹下において真理を大悟せられた瞬間、釈尊と真理実相が一体でありました。法なる真理と釈尊なる人間が全く一体不二であり、また真理と満物の関係もこれと同様で、證の境地では法なる真理と満物という存在とが一体となつてい

る。(次号に続く)

### 第二十八回遊神会書道展が開催される！ ところ：大阪美術倶楽部

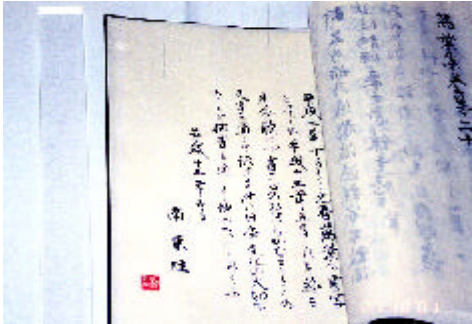
当寺福勝寺境内の蓮如上人ゆかりの『名号堂』のお軸『六字名号』を奉納賜つた南桂子先生よりご案内頂き、去る十月二十七日に参観させて頂きました。

初日、開館前の南桂子先生のご多忙の中会場のご案内、ご説明を頂きました。

亡き先代伊藤東海先生に中心帰一し、岡田東華先生の会長中心に作品出品者二百八十名、出品作品点数三百点に及び壮大でそれぞれ個性を持った作品は当に曼荼羅と感動の中に感じさせて頂きました。

当、和歌山からも数人の先生方が出品され、中でも私の足を引き止めた作品が重度障害者和田 和氏が足で書かれた『慶雲』の作品でした。筆の力強さに筆者和田さんの力強い「いのち」に圧倒されました。

自坊の境内に岩盤の上に杉の巨木と楠木が育んでおります。天皇が平安時代の熊野参拝の道中、お立ち寄り感動されたであろう。巨木を重ね思い出しました。『どんな苦しい厳しい環境でも生き生きと育む』和田さんの「いのち」を感じ取りさせて頂きました。合掌



南 桂子(南東桂)先生、ご出展品数点の中の一つ「万葉集巻第二十」



和田 和書

短歌

夏蝉のこえおとろへし

孟蘭盆の

昼を憩へば

法師蝉鳴く

夕去れば薪のほのほ

ゆらめきて

幽玄の世に

吾を誘う

(日前宮新能)

和歌山県那賀郡 谷澤規佐子作  
土佐日記の作者、紀之實之と永遠と今  
につなぐる紀家が宮司を務める日前宮社  
の荘厳な境内で能が演出される。

昼近くになるとあの煩かったクマゼミ  
が静まり、夕日と共に薪の炎と能舞台の  
演出が悠久の千年の平安をかもし出す。

#### 編集後記

すっかり紅葉の綺麗な清しい高野山へ上る。「大智度論」巻第九十三、法性身の仏が放つ光明は太陽や月が放つ光明に勝る。とは、大日経疏に説かれています。影をつくらず、昼夜の別なく、衆生のものの中をも照らす。ことを学びたい。

「法性身の仏、身に無量無辺の光明ありて、説法の音声遍く十方国土に満ち、国中の衆生は皆な是れ仏道に近づく者、無量阿僧祇由旬あり。衆中の説法は、無量億阿僧祇の日月の光明に勝る。……」

仏の光明に影は無い。 合掌